



春秋左氏伝
宝暦5年(1755年)
乙亥歳正月
京師三条堀川東入町
中江久四郎 書林版

北基行 訳

变三不知为三知

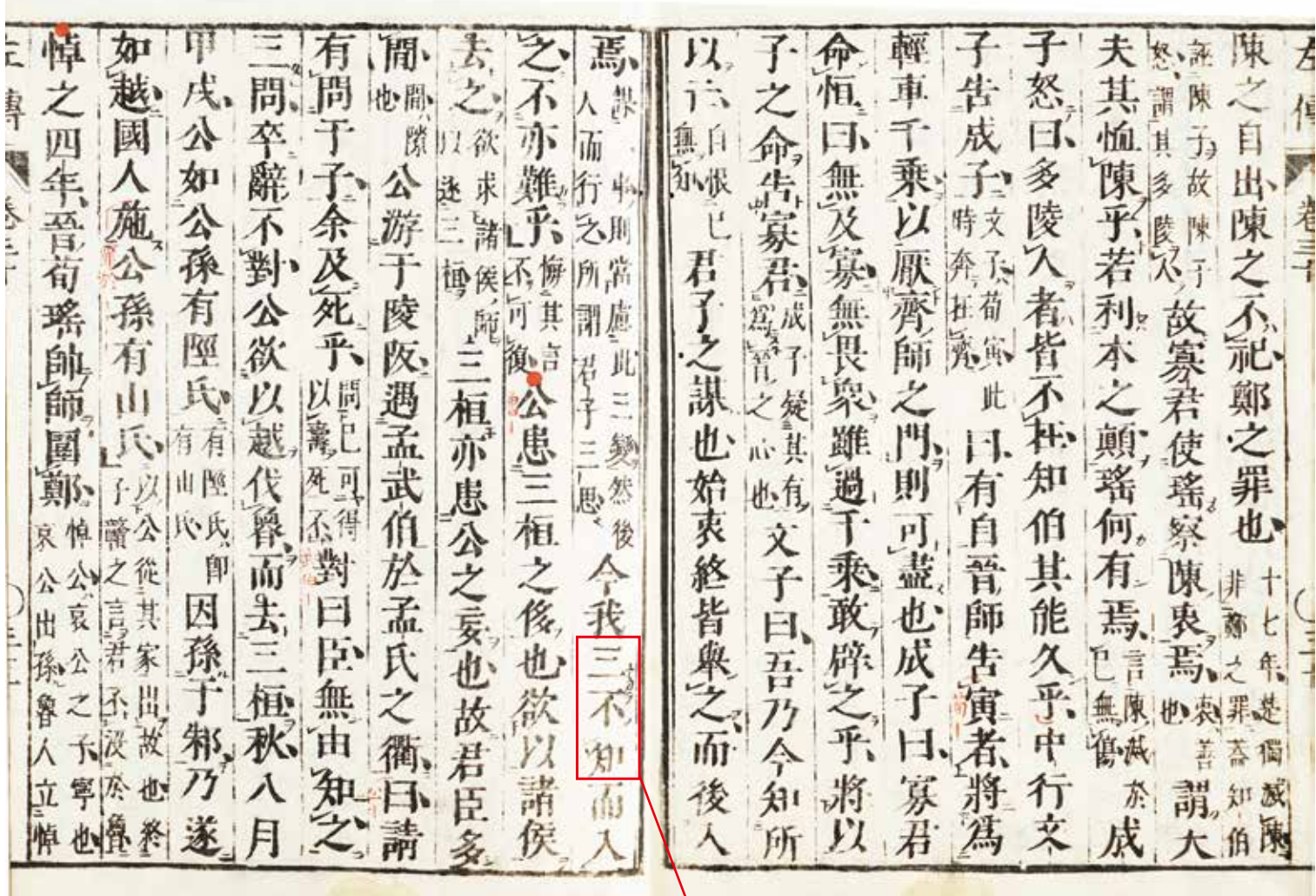
三不知を变え三知となす

話が調査研究の仕事になると、あまりにも実情にうとくて、恥ずかしい思いをさせられ、業務上でなにか相談されれば、とりあえず「三不知」と云ってその場逃れをする。これは、ほめられた事ではないが、かといって、ほかに方法がないからすぐにやめられない。それで、始終後ろめたくて気が重い。どうすれば、三不知の淵から逃れ出て、三知の域にたどれるか？これは、誰もが関心のある問題だ。

何が三知で、何が三不知か、まずそれをはっきりさせておこう。“某部長は現場を全然知らない。何を聞いても、「三不知」とくるから、下の者はかなわんよ。”よくある話題だ。こんな時は、「三不知」とはどういう意味かと部長に聞いたらどうだ、答えにならない、「三不知」が返ってくるだろうが。

「三不知」という成語が世にはやって久しいが、この用語がどこから来たか気に留める人はすくない。明代に、江寧の人で、姚福という学者が居た。名の売れた学者ではないが著書に『青溪暇筆』があり、ここに始めてこの言葉の考証が現れる。それはこう記している。“俗に忙遽を謂いて三不知と曰う、即ち始、中、終の三者にして、皆知ること能はざるなり。その言蓋し『左傳』に本づく。”彼が下した三不知の解釈は明確で、しかも出典を明らかにした。

面倒でも、原典にもどり『左傳』を繙くでしょう。魯哀公二十七年にこのような記載があり、三不知の語源の典拠にたどり着くことができる。この出だしはこうである。晋の荀瑶が師を帥いて鄭を征伐しようとして、このことが起きた。当時、荀文子は敵情が不明のため軽率に進まなかった。彼は云った、“君子の謀なるや、始、中、終皆之を挙ぐ、而る後、焉（ここ）に入る。今我三を知らず而して之に入れば、亦難ならざるや！？”ここから言えることは、三不知とは、事件の発端、経過、終局情況が把握できていないことを、三知は、“始、中、終みな之を挙ぐ”の意味で使われている。



魯哀公二十七年

今我三不知而入之、不亦難乎

これは、調査研究における、一つのすぐれた実施方法を示唆しており、説く理屈は重要である。即ち、客観的事物は、始、中、終に分けて観察し、その変化を調査研究することが大切なことを教えている。

“始”とは何か？事物の起源、開端または創始の段階を述べ、それには事物の発生的歴史背景や萌芽状態の諸情況を含む。“中”は、事物発展におけるすべての経過情況であり、それには事物の上昇や下落期間における複雑な変化過程を含む。“終”は、事物が発展変化を遂げた結果であり、一過程の終了である。もちろん、この過程が終われば、また別の新しい過程がはじまるのであるが。

新しい専門用語を用いて、この三段階の情況を総合し、究明すれば、所謂三知の意味するところは、客観事物に対して歴史的、現実的に全面的な調査研究を行うということにならないか。さもないと、客観事物は三不知と化するのである。事物の発生から発展は、始、中、終の三段階の経過を見る、一つの全き歴史過程である。そのうち、事物の原始段階と中間段階は、歴史の範疇に属する部分である。事物の終結部分は、往々にして眼前の現実を指すのである。因って、これらに全面的に研究し、研究成果を総合すれば、全面的認識を得ることができる。

調査研究に於いて、一つの結果を得て得意げに喜んでほならない。事実が証明するように、これでは絶対的に不足だ。多くの同志が、ある事件の現状或いは対策の最終数字を知ってはいるが、これがどこから出て来たものか無関心である。一部の表面的現象に基づいて判断が下され、実際状況との間に不一致が発生する。またよくある欠点は、資料収集や調査の段階で、些細な現象に惑わされ、系統的な研究がおろそかになり、客観事物と認識の間に分散概念が生じ、整合性のとれた科学的結論が出てこない。このような人はそれぞれの事項には詳しいが、やはりこれは一問三不知の類だろう。或いは其の一を知り其の二を知らず。或いは其の二を知り、其の一を知らずと言うべきか。

なんでもかんでも知らずと性急なもの、実際にそぐわない。客観的実情に応じて、軽重緩急をつけて、前後関係を重視し系統的に調査研究することが大切である。このようにして、一問三不知の情況を改善し、徐々に三知まで向上させることができるのだ。

【掲載当時の時代考証と秘められたメッセージ】

「变三不知為三知」ひとそえ

新聞報道畑での経験が長い作者が、冒頭から物事を知らずに仕事をしていることを自省的に書いています。三不知、三つの知らないこととは何かについて『青溪暇筆』という明代の余り有名とは言えない書物から説き起こしています。そして結局は三不知といえば誰もが挙げる『左伝』第12巻魯哀公二十七年の記述を引用しています。

ベテランが自省的な筆致や口調で伝えるときには要注意です。また直截に言わず婉曲に表現されると不気味です。『左伝』に直行せず、『青溪暇筆』経由というのも無駄な大回りですが、不気味さを深める仕掛けであり、三知であることを強調しているのかも知れません。

続いて始中終（始衰終。ショツチュウ）の丁寧な解説が続きます。一見穏やかに、必要とされる発想や姿勢を一般論として述べたあと、滴を持したかのように、我们決不要以为・・・と強い調子に急転回します。短い段落のなかで「只（だけ、しか）」という限定を表す単語を4回も使って、多くの同志たち（たぶん若手の党員や役人）の視野の狭さ、手法の拙さを厳しく批判しています。

ベテランが低姿勢に出たら気を付けろ、これはどの時代も同じでしょう。 井上邦久

变三不知为三知 原文

我们有时候谈起调查研究工作，就不免觉得惭愧，深深地感到自己对实际情况了解太少，遇到别人问起许多实际工作中的问题，常常一问三不知。这种现象很不好。但是，似乎一下子又不能完全克服。因此，心里总觉得纳闷。究竟怎样才能克服三不知的毛病，而做到三知呢？这是大家普遍关心的问题。

首先要弄清楚：什么是三知？什么是三不知？人们往往嘴里会说：“某某干部简直不了解情况，一问三不知，真糟糕。”如果你要他解释怎样叫做三不知，管保他同样也是一问三不知，根本答不上来。

三不知这个成语已经流传很久了，历来却很少有人注意去查究这个成语的来源。到了明代，有一位不太知名的学者，江宁人姚福，在他所著的《青溪暇笔》这部书里，才做了一番考证。他写道：“俗谓忙遽曰三不知（俗に謂う「三不知」を云うのに忙しいと云うことは），即始中終三者，皆不能知也。其言盖本《左傳》。”他不但把三不知的含义做了很明确的解释，而且指明了这个成语的出处。

那末，我们不妨翻阅一下《左傳》吧。在魯哀公二十七年的记载中，的确可以找到三不知这个成语的来源。事情是由晋荀瑶帅师伐郑引起的。

（古文の部分を訓読すると、「荀瑶、師（し）を帥（ひき）いて鄭を伐（う）つ」。「師」は軍隊、日本でも伊丹師団のように使っている。兵2500人を「師」と謂う。「帥」は動詞で、率いる）

当时荀文子认为对敌情不了解，不可轻进。他说道“君子之謀也，始中終皆舉之，而后入焉。今我三不知而入之，不亦難乎！？”由此可见，所谓三不知原来说对一件事情的开始、经过、结局都不了解，而所谓三知就是“始中終皆舉之”的意思。

这个道理很重要，它给我们指出了对实际情况进行调查研究的一个好的方法，就是要对客观的事物，由它的始、中、終三个阶段的发展变化上进行调查研究。

什么是“始”呢？这就是事物的起源、开端或創始的阶段，它包括了事物发生的历史背景和萌芽状态的种种情況在内。什么是“中”呢？这就是事物在发展中间的期间的全部经过情形，它包括了事物在不断上升或逐步下降的期间各种复杂变化的过程在内。什么又是“終”呢？这就是事物发展变化的結果，是一個过程的終了；当然它同时也可以说是另一个新的过程的开始。

把这三个阶段的情況总合起来，我们如果用新的术语加以阐明，那末，所谓三知的正确含义，应该说就是对于客观事物进行历史的现实的全面的调查研究。否则，对客观的事物就是三不知了。事物发生和发展的始、中、終三个阶段，是一个完整的历史过程；事物的原始阶段和中间阶段更显然是属于历史的范畴。至于事物的終結阶段往往就是当前的现实。而对于这些又都必须进行全面的考察，把这些考察的結果综合起来，就得到全面的认识。

我们決不要以为，调查研究只知道一个結果就够了。事实证明，这是绝对不够的。有许多同志常常只晓得某一件事情的现状或工作的最后总结数字，而不晓得这些东西是从何而来的。因此，他们有时候根据一些表面的現象所做出的判断，就不免与实际情況不符。也有的同志只注意收集和调查许许多多零碎的现象，而缺乏系统的研究，以致他对客观事物的认识只能形成若干分散的概念，根本不能做出完整的科学的結論。这样的人即便知道了很多的一个一个分散的互不连贯的现象，实际上还必须然是一问三不知；或者知其一而不知其二；或者知其二而不知其一。

当然，过于性急地要一下子把一切事情的来龙去脉都知道得清清楚楚，也是不切实际的想法。我们应该对客观的实际情況，分別轻重緩急，先后有步骤地进行系统的调查研究，才能逐渐改变一问三不知的状況，真正做到三知。